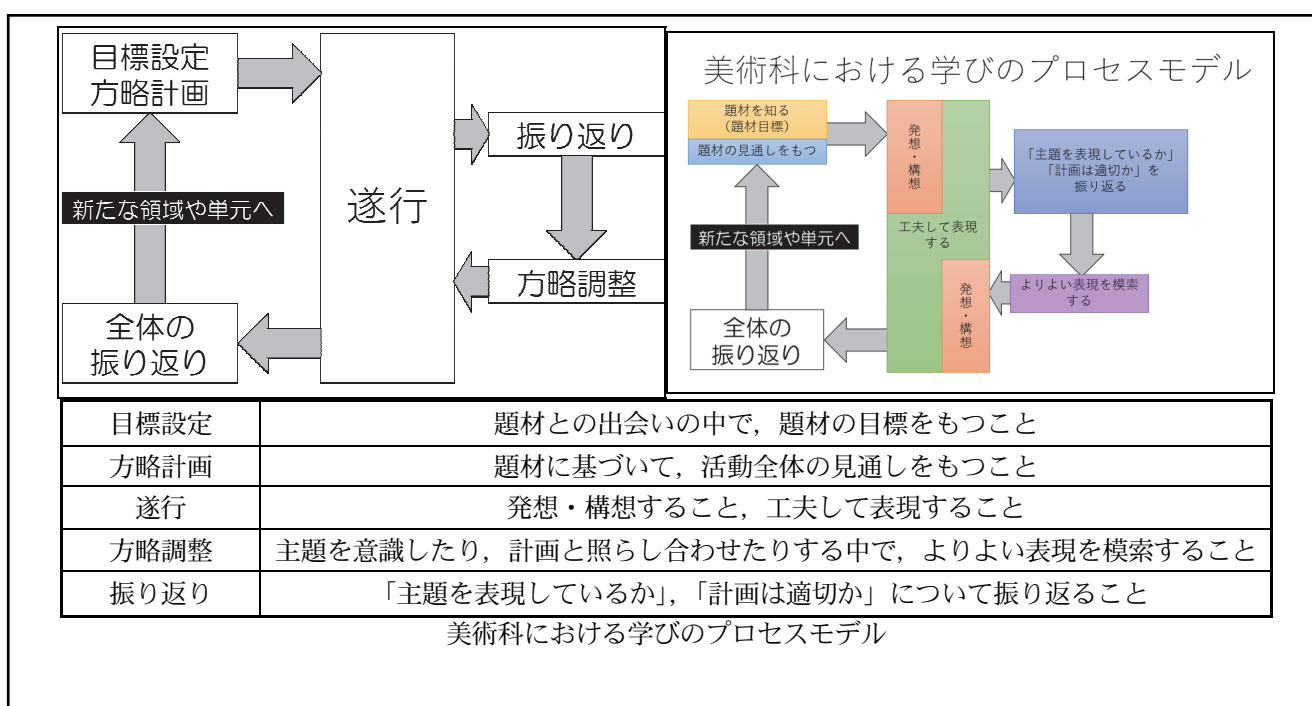


1. 美術科研究主題について

(1) これまでの本校美術科の研究

令和4年度から令和6年度の3か年は、全体研究において『新たな価値を創造する生徒の育成～「主体的な学び」のプロセスモデルを生かした実践を通して～』という研究主題の基に、「創造性」に着目して研究を行った。その中で美術科においては、「創造性」を自らの経験等をもとに対象や事象に向き合い、作品を通して「何を表したいか」を問いかけることで主題を生み出し、主題を「どのように表現するか」を形や色、描き方等を考え解決する中で生まれる、新たな意味や価値をつくりだすための資質・能力と考えた。以上を踏まえ、生徒が「問い」から新たな意味や価値をつくりだす中で、主題を生み出し表現していくための美術の資質・能力を育む授業の工夫について明らかにすることを目的に研究を行った。



(2) 生徒の実態

生徒たちは、情報通信技術の発達により豊かな視覚情報のなかで生活している。AIを活用したり、インターネットを利用し検索したりすることで簡単に情報が入手できる一方で、自分独自のものを生み出したり、物事に対して実感をもってとらえたりする経験が少なくなっている。またAIの発展により、文字を入力するだけで、簡単に画像を生成できるようになったことで、自分の求めている画像が簡単に手に入るようになった一方で、自分の本来求めているものを深く追求していく機会が失われているのではないだろうか。こういった状況にあるからこそ、例えば、表現活動においては「何をつくったか」ではなく、「どのような過程の中で何を学んだか」がより重要になっていると考える。

学校生活において生活面では、失敗することを恐れたり、また自分で試すことなく正解を求めたりする姿がたびたび見られる。失敗を恐れることで、失敗して学ぶという経験が少なかったり、最短で正解することに重きを置くことで試行錯誤する経験が限られていたりする。

学習活動では、概して意欲が高く主体的に取り組もうとする。美術科の学習においても、課題の内容や取り組み方がわかると積極的に取り組む。しかし、本校で実施した「学びについての調査」の結果から、協働学習において、「他者をサポートする」意識が低いことや、他者との関わりの中で「自信をもつことができていない」というのが明らかになった。

以上の実態を踏まえ、美術科においては以下の課題に着目し、研究を進めていく。

- | |
|---|
| ①最短で最適解を求めることを重視するために、成功と失敗を繰り返すことができない。
②生徒の中には、自分の表したいものや感じたことに自信がもてないことで、発想や構想することが難しかったり、作品を鑑賞しても感じたことを言葉にすることができなかつたりする生徒もいる。
③他者との関りの中で、協働を通して考えたり、新しい考えを取り入れたりする等して学びを深めることが難しい。 |
|---|

このような実態に対して、仲間と共に試行錯誤を続ける中で、資質・能力を伸ばすことで、自分自身の考えに自信をもって、よりよいものをめざして問い続ける態度を育てていきたい。結果、自立した学習者を育てることにつなげていきたい。

(3) 全体研究主題より

美術科における自立した学習者とは

美術科において目指したい自立した学習者の姿について、以下のように整理した。

- | |
|---|
| ア. 問いをもち主体的に取り組む姿勢
・与えられた課題に対して、自分なりの主題をもち、主体的に表現方法を見つけることができる。
イ. 問いを繰り返す中で試行錯誤しながら工夫する力
・制作の中で、表現や技法等について、既習事項を振り返ったり、自分で調べたりすることで、よりよい表現を追求することができる。
ウ. 他者との関わりを学びに変える力
・他の生徒の作品や意見を尊重し、鑑賞の中で仲間の作品を見て刺激を受けたり、作品の感想や意見を求めたりしていく中で自分の表現を見つめなおし工夫することができる。 |
|---|

上記を踏まえ、自立した学習者を育成していくためには、ただ与えられたことに受け身の姿勢で取り組むのではなく、課題に対して、感性や想像力を働かせ、対象や事象を造形的な視点で捉え、自分としての意味や価値をつくり出す活動に、主体的に取り組むことができる授業が重要だと考えた。そういった授業を実践していくために、昨年度までの研究でも焦点を当てた「問い」が重要になると考える。自身の「問い」を繰り返しながら、題材に向き合っていくことが、自立して学習に取り組むことに繋がると考える。以上を踏まえ、生徒自身がそれぞれの「問い」をもって取り組むことのできる題材を検討するとともに、授業の中での働きかけについて研究を行っていく。

2. 研究の目的

生徒が「問い」をもち、実感を伴って、自ら主題を生み出し表現していくために必要な美術の資質・能力を育む授業の工夫について明らかにする。

3. 1 年次の研究

1 年次においては、「問い」を促す授業を展開していくために、生徒が表現に親しみ、試行錯誤を重ねながら自分なりの表現を模索できる題材をつくっていくことを目指す。授業を実践していくにあたって、以下のようにまとめた。

(1) 「実感」を伴った理解

試行錯誤し続ける態度の育成にあたっては、「実感」を伴う経験を得ることが重要だと考える。本校の生徒の実態でも挙げたように、自身の活動の中で成功や失敗の経験が少ないことで、実感として得られる知識が少ない状況にある。その経験の少なさによって、試行錯誤する活動に価値を見出せなかつたり、主題をもつことはできても問いを深めることが難しくなつたりするため、自ら進んで考えることができない状況が生まれると考える。そこで、主題をもち、自分の表したいイメージを追求していく中で行われる、試行錯誤できる機会をもつことで、実感が伴う理解ができる経験をつくっていききたい。その経験から、自ら考え、活動できる生徒つながっていくと考えた。以上を踏まえ、題材の中で試行錯誤できる環境や時間を設けたり、表現と鑑賞を一体化させた授業を取り入れたりすることで、実感をもって、理解し、学びを展開させていくことに繋げていく。

(2) 題材設定

生徒が表現に親しみ、試行錯誤をしながら主体的に活動に取り組むことができる題材をつくっていくためには、生徒にとって魅力的な題材が重要である。題材の計画にあたっては、昨年度までの研究において、生徒の学ぶ意欲を維持させるような題材を設定していく中で考えるべき視点について以下のようにまとめた。

〔題材について〕

生徒にとって魅力的な題材を扱うことで自ら主題を生み出すことのできる活動を設定する。

- 関係性…生徒にとって身近な内容であること
- 難易度…生徒にとって目標を実現する可能性が感じられること（テーマ・材料・用具）
- 必然性…生徒にとって考える価値があること
- 多様性…考えや表現の多様性があること

上記に述べた視点を内容のまとまりに応じて題材を考えることによって、生徒の主体的な学びを維持することにつながるのではないかと考える。学年や生徒の実態、学ぶ環境に合わせて題材を設定していく。

（３）問いを深める働きかけ

問いを深めるためには、問いを深められる環境と機会をつくることが重要だと考える。そこで、問いを深める環境を設定するにあたっては、他者との関りが重要となる。他者の考えに触れることで、新たな気づきが生まれ、自分の考えを見つめなおすことにつながると考えるからだ。そこで、題材においては、学習形態を班型で行うとともに、ICTの機能を使って、他者の考えに手軽に触れることのできる環境や、活動の中で意図的に鑑賞する機会をつくることで、問いを深めることにつなげていく。

また、題材を設定していく中で、教員が意図的に発問をしていくことで、生徒が自分自身の中で問いを繰り返すことができるようになり、それが問いを深め、自立した学習者に近づく上で有効だと考えた。そのため、昨年度に継続して、発問の構造図を整理・分析していくことで、どのような発問や声かけが生徒の「問い」を深めることにつながるのかを検討していく。

昨年度の発問の構造図では、発問を分類する中で以下の４つに整理した。（昨年度までの研究においては、自分自身が生み出す“主題”に着目して発問を整理している）

発問の構成	① …主題を生み出すための問いに迫る主発問
	①´ …①の主発問に対する具体化や焦点化するための補助発問
	② …主題を表すための問いに迫る主発問
	②´ …②の主発問に対する具体化や焦点化するための補助発問
	③ …主題を読み取るための問いに迫る主発問
	③´ …③の主発問に対する具体化や焦点化するための補助発問
補足	①②③の主発問とは、活動全体を貫く問いを意味している。（授業の中で生徒に対して一斉に発問する）①´②´③´の補助発問とは、主発問を補助する発問である。（授業の中で主に一人の生徒に対して発問する）

①②③は主に、１つの活動を貫く、生徒が「問い」に迫るための主発問として分類した。しかし、生徒間の中で交流したり、自分自身の中で「問い」をもって活動に取り組んだりしていくためには、①´②´③´の具体化や焦点化するための補助発問を明確に分類していくことが重要だと考えた。それが、教員の問いかけだけでなく、生徒同士での交流の中の対話になったり、ワークシートの作成にもいかされたりすると考えたからだ。以上を踏まえ、補助発問を、資質・能力と照らし合わせて、発問を整理したのが以下の表である。今回は、絵や彫刻に表現する活動における補助発問を挙げている。

資質・能力	発問の意図	補助発問の例
知識・技能	造形的な視点から特徴を捉える イメージや作風を捉える 創造的な技能	どのような特徴があるだろう。 どのようなイメージが感じとれるか ○○なイメージはどのように表現できるだろう。 これからどのように表現していく予定だろうか。
思考力・判断力・表現力	主題の焦点化（発想） 主題の具体化（構想） 鑑賞の能力	どのようなイメージを伝えたいか。 どのような思いを伝えたいか。 ○○なイメージはどのように表現できるだろう。 この作品にはどのようなよさがあるだろう。 作者のどのような意図を感じ取れるか。
その他	活性を促す	もし○○だったらどうだろう。

上記の表のように、主にワークシートを作成するときや、活動中の生徒に問いかける中で繰り返し問うことで、問いが定着すると考える。問いをもとに、生徒が交流しながら共に、見方や感じ方を深めていくことの面白さを実感し、主体的に学べる授業を目指していく。

8. 参考文献

- 国立教育政策研究所 教育課程研究センター(2020)
『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（中学校 美術）」
- 文部科学省(2017)『中学校学習指導要領解説 総則編』
- 文部科学省(2017)『中学校学習指導要領解説 美術編』
- 山梨大学教育学部附属中学校(2022)『令和4年度 研究紀要』
- 山梨大学教育学部附属中学校(2023)『令和5年度 研究紀要』
- 山梨大学教育学部附属中学校(2024)『令和6年度 研究紀要』
- 新野貴則 古屋美那実(2024)
『主体的な学びの実現を目指す美術科の指導方法―生徒の問いの形成を促す発問構成―』
- 三澤一実(2024)『造形実験』武蔵野美術大学出版局